

イギリス・コッツウォルズ、 フットパスの旅

丹羽真一

昨春、イギリス旅行に出かけました。目的はフットパス・ウォーキングです。5日間で歩いた距離は50km余り。フットパスをめぐるながら当地の自然環境に触れたり、農村観光を体験したりしました。季節はまだ早春でしたが、楽しみにしていた野の花やマルハナバチの観察もできました。北海道の自然環境とも似通っているの、自然観察記として拾い読みしていただければありがたいです。

コッツウォルズ：地理、自然、歴史

マルハナバチの本をいろいろ集めているが、イギリスのものが多く、読んでいるうちに向こうの自然に興味を持つようになった。特に、イギリス政府が生物多様性保全に力を入れているという農村部の様子を見てみたかった。少し前から計画を立て、フットパスや農村観光でも有名なコッツウォルズ丘陵を旅先に選んだ。

コッツウォルズは、イングランド西部、オックスフォードの西に広がる標高200～300mの緩やかな丘陵地である。内陸にあることもあり、気温の年較差はやや大きい。北海道とは気候風土、植生などが似ている。ここでは丘陵地という地形的な制約もあって、農地と孤立林がモザイク状に分布する。農地では羊の放牧地や小麦畑が目立つ。孤立林はヨーロッパブナの二次林が多いが、時折大木の森も見られる。ヨーロッパブナの森は、植生的には日本でいうところのブナ林よりもミズナラやカシワの林に似ている。野生の動植物には北海道と共通する種や近縁種も多い。

現在も牧羊が盛んな土地だが、産業革命前の中世には羊毛業で栄えたといわれる。



丘陵地の中に点在する村々には、薄黄色の古い石造り家々が多く、当時の様子を今に伝えている。集落全体が観光地になっている所も多く、日本からの観光客も多いといわれる。

フットパスとは

イギリスではウォーキングのための小道が全土に張り巡らされている。フットパスの起源は古く、ウォーキングが娯楽となった中世に遡るといわれる。森林や川沿いはもちろん、牧場やゴルフ場に利用されている土地の中にもフットパスはある。私有地

であってもパブリックフットパスに認定されていれば、外国人を含めだれもが歩くことが許されている（通行権が法律で認められている）。日本の遊歩道とはかなり異なるもので、『ウォーキング大国イギリス』（平松純著、明石書店）を読むと奥深いものであることが分かる。パブリックフットパスには、ドングリマークの標識が付けられている。

旅の準備

札幌のエコネットワーク（代表・小川巖さん）では2002年から毎年春に、イギリス周辺のフットパス・ウォーキングのツアーを出している。小川さんの呼びかけなら自然好きが集まるし、ツアー旅行の気楽さも魅力だったが、時期が合わないのでやむなく個人旅行にした。ただ、自分で全部調べてというのは面倒だと思っていたのでネットで探すと、ウォーキングツアー専門の業者が地元にあることを知る（その名もコッツウォルズ・ウォーキング・ホリデイ社、本社チェルトナム市）。しかも日本に代理人がいて取り次いでくれる（サイトも日本語対応）。宿の手配とお勧めルートの紹介が基本サービスで（地図と解説）、ガイド同行のオプションもある。フットパスのルートは網の目状に無数にあるので、お勧めルートの紹介はいいのかもしれないと思ったし、こちらの要望（日程や見たいものなど）に沿って多少のアレンジもしてくれるらしい。また、宿を移る縦走の時は荷物だけ運んでくれるので、ウォーキング中は手荷物だけ持てばいいというのも便利である。結局、ここのツアーに申込みをする。飛行機やコーチ（都市間バス）、鉄道などは日本からネット予約をしておく。

旅程

当初は4/13～21の予定だったが、アイスランドの火山噴火の影響で足止めを食い、27にようやく帰国できた。

4/13：移動日

いよいよ旅が始まった。新千歳 - 成田 - ロンドン（ヒースロー）と空路移動し、コーチでチェルトナム市に入る。チェルトナムはコッツウォルズの玄関口の一つ。イングランド南西部、グロスター州の主要都市ながら人口は10万人ほどで、新旧の街並みが並存する。到着が夜だったのと宿が中心部から遠いということで、ツアー会社のスタッフがバスの停留所で出迎えてくれたうえに、最初の宿（B&B）までタクシーで送ってくれる。明日からのフットパス・マップと解説もこの際に受け取る。機内ではほとんど眠れていないので、時差の関係で長い一日となった（宿に入ったのは起床から23時間後）。宿の女将さんは英会話ができない客に少なからず困惑していたが、熱心に対応してくれた。

4/14：チェルトナム～ブロードウェイ

朝はまだ時差ぼけが残る。移動疲れとそれまでの日常的な運動不足もあって、初日は軽いコースに変更する。しかし前夜降りたバスターミナルまでの道で迷い、予定のバスに乗り遅れる。それなら買い物でもしてからとっていたら次のバスも逃す。もう昼まで便はなく、いきなりの（しかも初歩的な）ミスで連続でへこむ。しかたなく近くのタクシー会社に行き、車を出しても



らう（ちょっと痛い出費）。

肌寒い陽気のせいもあり、ブロードウェイに着いてしばらくは心も体もまだモヤモヤしていたが、歩いているうちに気持ちも天気も晴れてきた。ブロードウェイはコッツウォルズの代表的観光地で、「蜂蜜色」といわれる古い石造りの家々が並ぶ美しい町。名前は広い通りに由来するとか。オフシーズンだったが、日本人観光客も2、3組見かけた。

名所のブロードウェイ・タワーを目指して丘を登っていくと、このためにイギリスまで来たんだなあとうれしくなる。フットパスは牧場の中を歩いていて、羊があちこちに群れを作っていてこちらを見ている。花はまだ少ないが、草原には春植物風のヒメリュウキンカ（英名 Lesser celandine、リュウキンカに似ているがイチゲの仲間）で学名は *Ranunculus ficaria* が咲き出していた。観光シーズンではないが、同じようにフットパスを歩く人たちがいて、すれ違いに挨拶を交わす。

短い散歩だったが、明日の縦走に向けて有益な体験となった。フットパスは日本の整備された遊歩道とは異なり、道を見失い

やすいとは聞いていたが、これほどとは…。特に牧草地内では踏み跡もほとんどなく、トラクター道に惑わされることが多かった。地形図を読む力が求められる。

4/15：チェルトナムからペインズウィックへ

今回の行程中、もっとも長いコースのはずだった（20km）。宿の女将が心配して、歩くのをやめてバスかタクシーで行ったらどうかとしきりに勧める。ベリーロングだから途中で疲れてしまったら、あなたたち会話ができなくて大変なことになるよと、まるで子供を諭す大人のようなのである。心配してくれてありがたいが、それでは何のためにイギリスまで来たのかという話である。少し考えて、チェルトナムの街外れ（Leckhampton Hill）までタクシーで行き、5kmほど歩く距離を縮めることにする。女将もそれならいいわねと言って、タクシーを呼んでくれ、値段の交渉もやってくれた（おまけに次の宿泊先にも電話してくれたが、目の前で”Very difficult to communicate”と言われたのには苦笑した）。女将さんには丁重にお礼を言って別れた（チップも多めに）。

こうして、採石場（quarry）跡地が今日の出発地になった。今も石造りの家が立ち並ぶこの辺りでは、大小の採石場がいたるところにある。曇り空で風が冷たく、歩いている人は全くいない。地図は持っていたが、最初は道がよく分からなかった。標識はまれで、矢印の先に踏み跡が見えないことも多かった。ただ、昨日の経験でフットパスのイメージができていたのはよかった。

広い畑の中を走る細い農道伝いに歩き、ときどき点在する農家の庭先を横切る。畑



はずでに耕されていて、まもなく植え付けが行なわれるところだった。秋まき小麦の畑も多かった。ただ、この辺りの畑はどこも石ころだらけで、土地が痩せているように見える。畑の脇には、本で読んだ通りの生垣が作られている。セイヨウサンザシがよく使われている。路傍の花はわずかだが、ワスレナグサやドワーフコンフリー *Symphytum grandiflorum* が咲いている。

樹林（落葉広葉樹の二次林）に差し掛かると、道がはっきりして安心する。しばらくは馬の道 (Bridle way) が併走する。高木はまだ展葉していないが、林床にはヤブイチゲ *Anemone nemorosa* (英名 Wood Anemone) やヤマアイ (*Mercurialis perennis*, 英名 Dog's Mercury)、野生のクリスマスローズ (*Helleborus foetidus*, 英名 Stinking hellebore) の花が咲いていて、初めてなのにどこかなじみのある早春風景である。ヤブイチゲは、キクザキイチゲの葉にあズマイチゲの花が付いているようだ。ヤブイチゲの群落にはたいていブルーベルが混生しているが、残念ながらまだ花は咲いていない。ところどころギョウジャニンニクそっくりな植物に一面林床が覆われている。葉先を折ると紛れもないニンニク臭がするが別種である。学名は *Allium ursinum* で、クマ (*Ursus*) のネギという意味らし

く、当地では山菜にはなっていないようである。後日ペインズウィック近郊で花を見たが、ツバメオモトのような愛らしい花だった。樹林の核心部は Crickley Hill と呼ばれ、ヨーロッパナの老齢林があって自然保護区になっている。ゆっくり見ているゆとりがなかったが、小さなビジターセンターもあった。

Crickley Hill の先に、小さなU字谷があった。詳しいことは分からないが、氷河の侵食地形なのではないかと思う。谷の中は牧草地になっていて、枯れ草の中から少しずつ牧草の芽が伸び始めているところだった。ちょっと不思議な模様の牛が放牧されている。

小さな集落でパブに入り、昼食を取る。寒かったが、せっかくなのでビールも注文する。広いフロアには英国紳士風のご老人たちの一団しかいない。ビールを飲みながらおしゃべりを楽しんでいた。

店を出て歩き出すと、フットパスは再び樹林に入っていく。細い木ばかりのヨーロッパナの二次林には、レンプクソウやネコノメソウ、コミヤマカタバミなどの見知った花に加えて、プライムローズ (*Primula vulgaris*) の花があちこちに咲いている。シダではコタニワタリとチャセンシダを見つけた。

本日の行程の大半を歩き終えたところで、目の前にゴルフ場が現れる。フェアウェイにフットパスの標識が立っていて、仕方なくそれに沿って歩いていく。プレーヤーはいないが、きれいに手入れされている。ゴルフ場を過ぎたところで、犬の散歩中のおじいさんに声を掛けられる。おれは日本に行ったことがあるよと言っていた。握手をして別れる。ほどなくペインズウィックの町に入る。話に聞いていた通り、中世のよ

うな雰囲気の良い町である。

4/16：ペインズウィック滞在

今日はペインズウィックを北から西に回る9kmの短いコースが設定されている。前日の疲れを考えたものらしい。目覚めると確かに足に疲れが残っている。しかし、天気が回復し、空が明るい。外に出てみると、白い石造りの家々と狭い路地のコントラストが冴え、ペインズウィックの町並みが昨日より輝いて見える。春の陽気とはいえないが、日差しの暖かさを感じる。民家の花壇ではチューリップやスイセン、ムスカリの花がよく咲いている。

家並みを抜けると、広々とした牧草地が現れる。晴れているせいか、昨日より緑が鮮やかだ。これまで見てきたヒメリュウキンカに加え、セイヨウタンポポやハナタネツケバナの花が咲いている。ハナタネツケバナは日本では釧路湿原など限られた場所にしか生育しない珍しい植物だが、ヨーロッパでは雑草のイメージに近い。牧草地では草地改良が行なわれているが、林縁などには野生植物がそれなりに生育する。樹林のこずえで咲くカエデの花は遠目からもよく目立ち、日差しのおかげで林床のヤブイチゲが咲きそろっている。また、イギリスの春の象徴とされるブルーベルもちらほら咲き始めている。

狭い樹林を抜けると、フットパスがゴルフ場を横切る。数人がプレーしているが、ウォーカーを見つけるとプレーを中断して通り過ぎるまで待っていてくれる。ペインズウィック・ビーコンという高台の遺跡にたどり着く。展望台からは州都グロスターの市街地が見える。手前の草地ではアナウサギが数頭じゃれ合ったり、走り回ったり



している。アナウサギは今回の旅では何度も見かけ、ピーターラビットの国を実感した。

少し休憩を取った後、小道を伝ってスプーンベッドという小さなU字谷に下りて行く。この辺りの畑も痩せた感じがする。畑にはときどきキジがいて、何か餌を探しているが、人影を見ると慌てて生垣や石垣の陰に逃げ込む。生垣や石垣が動物に利用されている例の一つである。畑の縁の草地には、日本でもおなじみのオオイヌノフグリやオドリコソウなどが咲き始めている。気温が上昇したのでマルハナバチを期待していると、見知らぬハナバチが草の上に止まっていた。短くて黒っぽい体毛に覆われ、後脚は硬そうな黄色の毛がびっしり生えて花粉かごがないように見える。マルハナバチ類に労働寄生するヤドリマルハナバチなのかもしれないが、見たことがないのでよく分からない。さらにいくと、畑の土手にコバノカキドオシが咲き、何頭かのマルハナバチが飛んでいた。面長で中舌が長く、日本でいうところのトラマルハナバチに似ている。

湧水地の近くではフットパスが小川のようになっていて、軽登山靴を履いていってよかったと思える数少ない場所だった。足元にはリュウキンカ（エンコウソウ）が咲いていて、見覚えのあるシモツケソウの葉

もたくさん見られた。サトイモ科のテンナンショウに似たロード・アンド・レディス (Arum maculatum、英名 Lords and Ladies) のつぼみがあった。

ペインズウィックの手前からはペインズウィック・ストリーム沿いを歩く。昔はいくつも水車があったようで、King's Mill などの地名が残る。16 時ごろにペインズウィックの町に戻ってくる。まだ昼間のように日は高く、宿に戻って身の回りを整えて、パブまで夕食に出かける。羊の料理がとておいしかった。

4/17：ペインズウィック滞在

引き続きペインズウィックに滞在する。昨日とは方角を変え、南東にある Bisley の町まで歩き、別のルートで戻ってくる 17km のサークルウォークに挑戦する。前日にも増してよい天気である。のどが渇きそうなので商店で大きめのミネラルウォーターを買う。ペインズウィック・ストリームを渡り、農道や農地の中を歩きながら丘を目指す。振り返ると、ペインズウィックの町並みの中に St Mary 協会のひときわ高い塔がそびえている。

丘は緩やかで、一部にブナやカエデなどの落葉広葉樹からなる二次林が孤立林として残る。州の自然保護区になっているところもある。昨日までの森とは少し異なり、林床にはキヅタなどの常緑植物が多く、大きな林冠木の幹に巻きついている姿がしばしば見られる。林床にはカラスシキミに似たジンチョウゲ科の低木が花を咲かせていた。

森を抜け、広々とした牧草地に出る。しばらく農家の私道と思われる尾根の小道を歩かせてもらう。両脇の生垣はとてよく

管理されている。家畜もたくさん飼育されているが、空気が乾燥しているせいか糞尿の臭いがほとんどしないし、日本でよく見られるように道路が糞尿で汚されていることがない。

Slad の町を遠巻きしたところで、斜面を一気に下る。途中、国道 (B4070) を渡る際にトレーニング中の自転車チームが通り過ぎる。Slad 川を渡ると Swift's Hill まで農道伝いに登る。日差しが強く、汗ばむ。Swift's Hill は採石場の跡地があったり放牧地になっていたりするが、現地にあった看板によればここは石灰岩質の丘で、グロスター州で最も野の花が美しい草原の一つと紹介されていた。珍しいランも多いようだが、残念なことにまだの季節ではなかった。

のんびりしていたので、Bisley の町には 13 時過ぎに到着した。ペインズウィックほどの大きさはないが、ここも古い家並みが残るきれいな町だ。町の外れで、子連れのお母さんにパブの場所を尋ねる。「日本人？

飛行機が飛ばなくて大変ね」と言われる。Bear Inn というパブ風の旅館兼レストランで食事をする。外のテラスでは若い女性 (主婦?) が大勢でビールを飲んでいた。すっかり外でビールが合う陽気になった。

Bisley からは、Wysis Way というフットパスの幹線を通してペインズウィックに戻る。ビールの酔いが残るが、天気がよいので足どりは軽い。途中、林地に接した畑で数頭のシカの群れを見かけた。種類は分からなかったが、エゾシカよりはやや小型で角の形が違う。その先の斜面林で、ヤマウツボ属の寄生植物 (Lathraea squamaria、英名 Toothwort) の花からマルハナバチ (Bombus pascuorum か) の女王が吸蜜しているのを観察できた。

しばらく谷あい歩き、Down Hill の丘を

トラバースし、Slad川を渡る。急な坂を登り終えると、再びペインズウィックの町が見えた。

4/18：ペインズウィックからストラウド、ストラウドからバース

朝食の際に火山噴火が話題となる。朝刊の一面には噴煙をもうもうと上げるショッキングな画像が大きくカラーで掲載されている。火山がないイギリス人にはさぞインパクトがあるだろう。しかし同じテーブルに座っている女性いわく、”Very beautiful!”。対岸の火事ということか。2泊お世話になった宿をチェックアウトする。

当初ストラウドの街まではバスで移動する予定だったが、歩く楽しさにすっかりはまっていたのと、ペインズウィックの町に未練を感じていたので、すべての荷物を背負って6kmほどの区間を歩くことにした。

昨日までのコースに比べると変化が少ないが、未踏のコースだし、何より底抜けに天気がよいので歩いて正解だった。緩やかな丘陵地の大半は牧草地や小麦畑だったが、ときどき小沢を横切るたびに小さな自然林が現れる。それに加え、農地の境界部には巨木と言って差し支えないブナの木立がしばしば残されていて、景観を引き締めている。遠ざかるペインズウィックの町並みに変わって、ストラウドの街が次第に近づいてくる。

ストラウド駅には2時間ほどであっさり着いた。バースに向かう列車まで少し間があったので、近くの食堂で紅茶を飲みながら過ごす。しばらく田舎暮らしが続いたので、ストラウドは都会に見えた。

スウィンドン駅で乗り換え、バースには15時前に到着する。バースBathはイング

ランド南西部の観光で有名な街である。温泉があり、街の名前が風呂（バス）の語源になったといわれる。荘厳な建物が林立する旧市街がそのまま残っており、全体が世界遺産に指定されている。この日泊るB&Bに早めにチェックインし、早速テレビをつける。噴火による領空閉鎖が続いている。まだ時間が早いので街を歩いてみることにする。

B&Bの近くにあるヘンリエッタ公園にはクロウタドリとハイイロリスがたくさん棲んでいる。クロウタドリはクロツグミにそっくりで、ヨーロッパでは日本のスズメのように身近な鳥である。家の屋根などに止まって、透き通った美しい声でさえずる。ハイイロリスは北米原産の外来種で、イギリスでは増え過ぎて歓迎されていないようだ。在来のアカリスを駆逐しているとも言われるが、確かに今回の旅でアカリスを見たのは1度しかない。野鳥用の給餌器にもリスが餌を取れないように工夫したものがよく見られる。

バースはかなり大きな街だが、日曜の夕方になると店の多くが一斉に閉じてしまう。うっかりミネラルウォーターを買い損ねそうになった。

4/19：バースからロンドン

チェックアウトし、とりあえず公衆電話から旅行保険の窓口で電話してみる。事故による滞在延長なら、宿泊費や飛行機代が補償されることになっている。「今回は自然災害なので保障の対象外です」とのことである。分かっていたことなので落胆はない。むしろ、足止めで契約期間が切れてしまっても旅行中は保険が無料延長になることが分かり、ちょっと安心する。ロンドンに早

く行く意味もなく、バースの街をもう一度ぶらぶら歩き、広場でパフォーマンスを見たりして時間をつぶした。

14時過ぎの列車でロンドンに向かう。到着したバディントン駅で撮り鉄をしていたら、警備員が走ってきてすぐ止めるように注意を受ける。どうも警備上の問題で撮影は禁止されているらしい(2005年の同時多発テロの影響か)。適当に謝ったら許してくれた。

地上に出ると駅前の交差点はかなりの人込みだ。予約していたホテルに入る。フロント係の英語がなかなか理解できずにいると、露骨に嫌な顔をされる。ほかにお客がいたわけでもないのだが、田舎では我慢してもらえたことを都会で期待するのは難しいか。噴火の影響で滞在が長引くかもしれないという、何日までと予め決めないと受け付けられないという。ロンドンで長逗留しなければならなさそうだが、何となくこのホテルではイヤだと思った。

テレビニュースで明日のフライトが100%ないこと、すべての航空券の予約がキャンセルされたことを確認する。テレビでは盛んに噴火の映像が流れ、帰国できなくなったイギリス人の様子が伝えられている。とりあえずここで一泊し、翌朝もう少し安くて快適そうなホテルを探してみることにする。

4/20：ロンドン滞在2日目

本当なら今日出国のはずだった。チェックアウトした後、日本のガイドブックで調べておいた別のホテルに行き、空いているかどうか尋ねる。空いているというので事情を話すと、一晩分だけ先払いしてくればそれ以降は後払いでよいという。いろいろ



ろ探し歩く元気も英語力もなく、ここに決める。航空券の再予約も代行してくれるというので頼むとその場で電話を掛けてくれる。回線がつながりにくいことやこちらの本人確認などで手間取り、1時間以上かかったが、粘り強くやってくれた。この後空港まで行かなければと思っていたので、本当に助かった。命の恩人に見えた。

できるだけ早い便を望んだにも関わらず、再予約は6日後だった。しかし、居場所も予定も決まり、安心して出かけられるようになった。テレビでは得られる情報が限られるので(テロップだけが頼り)、大使館に行ってみることにした。手荷物検査やパスポート確認を受け、待合室に通される。不思議なことだが、この中だけは日本である(門番はイギリス人だったが)。自分の番が来て、何か役に立つ情報などがあればと尋ねるが、「残念ながらこちらも報道以上の情報はありません」。旅行者の把握も特にしておらず、記名も求められなかった。待合室で日本のテレビニュースや新聞を見た。日本で足止めを食らった外国人が空港内で寝泊りし、ボランティアの炊き出しを受けている記事が印象に残った。自分も空港で待つ手は一応考えたが、外国の空港で何日も過ごすのは耐え難かった。公衆電話から会社と実家に電話を入れる。

大使館を出て、ハイドパークを散歩する。

広大な芝生の中にプラタナスやマロニエの大木が立っている。移動販売でパンとコーヒーを買い、ベンチに座って食べる。風は冷たいが、数日前にロンドンに降り立ったときより景色は春らしくなっている。その後、歩いて大英博物館に行く。丸一日かけてじっくり見たいので、今回はその下見である。

4/21～25：ロンドン滞在3～7日目

全く予定のなかったロンドン観光を楽しむ。著名な博物館・美術館が市内にひしめくが、1日1箇所に絞ってめぐることにする。災難ではあるが、警沢な話である。

21日はロンドン自然史博物館に行く。地学・生物学をベースに、地球の自然史を展示している。テーマの広さ・情報量とも非常に充実しているが、展示手法は全般にアナクロで親しみやすい。もちろん剥製をただ並べたような手抜きはなく、展示の意図ははっきりしている。一番人気は恐竜だが、阪神淡路大地震の体験コーナーもなかなかの人気だった。歩いて行ったので、行き帰りはハイパークでくつろぐ。



22日はキュー植物園に出かける。何となくロンドンで一番行って見たかったところだ。入館料を取らない博物館や美術館が多いが、ここは1人£13である。王立ということで、施設、庭園とも格調高く、エリザベス女王が実際に滞在する施設もある。世界遺産にもなっている。早春ということで花は少ないと思ったが、桜やツツジのコレクションが花盛りで、マルハナバチがたくさん群がっていた。園内の一角に日本の古い民家がある。実際に使われていたものを解体して運んだものらしい。外国人には人気なのかたくさんの方が訪れていた。一番印象的だったのは、樹冠観察用の空中回廊である。2008年に完成したもので、全長200mもある。高さは18mということだが、もっと高く感じる。足元は金属メッシュで、地面が透けて見えるし、これで強度は十分なのかとやや不安になる。園内では何組かの日本人と会う。声を掛けると、みな飛行機待ちとのことだ。

23日は大英博物館に行く。歴史の知識はないので、日本語の音声ガイドを借りる。世界中からかき集めてきたお宝、珍品が有り余るほど並んでいる。Dゼッタストーンなど世界史の教科書で見たものが次々目の前に現れる。これを入館料なしで見れるのか…。近所の子供たちが学校帰りにちょっと立ち寄りたりなんてこともできてしまう。



24、25日は美術館に行く。24日の夕方はパブに入り、地元民に紛れてサッカー・プレミアリーグを観戦する。地元アーセナルがホームでマンチェスターCを迎え撃つが、結果は0-0。得点が入って盛り上がるシーンが見たかったが残念。25日はロンドンマラソンで街は大変な賑わいだった。帰りの地下鉄は恐ろしいほどの人ごみだったが、テムズ川のほとりを走る市民ランナーを沿道から眺め、少しだけ参加した気分を味わう。



4/26～27：ロンドン・ヒースロー～ 成田～新千歳

朝起きるとイギリスに来て初めての雨。お世話になったホテルをチェックアウトす

る。ようやく帰国かと思うと感慨深い。思えば、再予約はしたものの、いつまた噴火でマヒするか分からない状況だった。実際、ここ数日もスコットランドの空港が何度か閉鎖することがあった。しかし今朝の予報ではアイスランド方面から風が吹き込むことはなさそうで、今日のフライトは問題ないだろう。

地下鉄でヒースロー空港に行く。チェックインの手続きがすんなりいくか心配だったが、窓口係は日本人で楽々クリアした。空港や税関はごった返していたが、機内は拍子抜けするほど空いていた。目を閉じて思い浮かぶのはロンドンで見たものばかり。コッツウォルズの思い出はずいぶん遠くに行ってしまった気がする。

カントリーサイドの保全が進む英国

イングランドは地形が緩やかなため農地開発が進んでいて、景観の印象は島国というよりむしろ大陸的である。その反面、森林は非常に少ない。日本と異なり生物多様性保全の気運が高まっているが、今さらそのため新たに土地を確保するのは難しい。そこで、すでに利用されている土地でいかに生物多様性の保全や生態系サービス機能の向上を行なうかという考え方にシフトしてきている。イングランドではDefra(環境・食糧・農村省)の環境スチュワードシップ事業を中心に、農村における生物多様性保全にかなり積極的に取り組んでいる。その手法は、農家に個別補償を行ない、生垣や農地脇の草地を適切に管理させたり、除草や農薬、施肥などの農作業に制約をかけたらしながら、野生生物の生息場所を確保するというものである。「ワイズユース」「持続可能な利用」という概念が、国家レベル

で実践されつつあるという印象を受ける。お金もかかる話だが、必要な生態系サービスの維持コストとみなされている。

例えば今回の旅で歩いたような丘陵地では、沢沿いや傾斜地などに二次的な林や草原が比較的残っているため、野生植物やマルハナバチなども多数観察できる。また、景観上重要な生垣や石垣などもよく残っている。環境スチュワードシップ事業はこうした農地以外の生物環境や景観を維持するためにも役立っているようである。

ウォーキングの服装について

平年より低かったせいもあるが、丘陵地のため4月中旬でも最低気温は0℃近くに下がった。歩き始めは、セーターの上にゴアテックスの合羽を着て、オーバーズボンをはくこともあった。帽子や手袋も重宝した。暖かい日中は、薄着で歩いていた。

事前情報を参考に足回りは軽登山靴にしたが、今回のコースならウォーキングシューズで十分だった。想定外のロンドン生活も軽登山靴で過ごさざるをえず、ちょっと恨めしかった。ただ、フットパスでは雨が降れば防水のしっかりしたものが必要になる。また、外国旅行でケガはしたくないので、しっかりした靴のほうが無難ではある。

また、高緯度とはいえ、日差しはかなり強い。日焼け止めはあったほうがよいと感じた。

エピソード—空港閉鎖でピンチ!!

思いがけず長期滞在になったことは旅程のところで述べたとおりだが、少し補足したい。アイスランドのエイヤフィヤトラヨークトル (Eyjafjallajökull) 火山が大噴火し

たのは旅行2日目の4/14。翌日には全土の空港が閉鎖になったことをテレビで知ったが、最初は深刻に捉えなかった。自分のフライトはしばらく先だったからだ。こんなときにフライトじゃなくてよかった、ついでと思った。曇っているわけでも、空の色が変なわけでも、硫黄臭があるわけでもなく、噴火を示すものは何もなく。最初のうちはのんきなニュースもあった。閉鎖前のヒースローと現在の映像を交互に見せ、いつもなら上空に何本もみられる飛行機雲が今は1つも見つけられませんと中継し、インタビューを受けた地元民も「静かだね」「たまにはいいね」と笑顔で答えていた。

しかし、出国日が近づいてくるのに一向に閉鎖が解かれず、だんだん焦りが募る。4/19、ブラウン首相(当時)と航空省?の責任者がテレビで会見した。しゃべっていることを理解できたわけではないが、“Volcano Flight Chaos”のテロップを見ればもう観念せざるをえなかった。

ニュースでは stranded という単語を頻繁に目にした。船やクジラの座礁でしか見たことがない単語だったが、海外で立ち往生した邦人に当てられていた(イギリスで立ち往生している外国人の報道はなかった)。空港閉鎖が数週間に及ぶ可能性があったため、火山灰の影響を受けにくいスペインに一旦邦人を集めて、そこから海路または陸路で輸送するプランが出ていた。実際、スペインやフランスに軍艦や長距離バスを派遣し、それに乗って帰国した人々の様子も報じられていた。ただし、これらの人たちが帰国したのは空路が正常化した後だった。なお、海外から最初の飛行機が到着したときは、一部始終をテレビが中継していたが、笑いあり涙ありだった。

エピソード—お天気

イギリスの天気は変わりやすいといわれるが、滞在中、雨が降ったのは最終日の朝方だけだった。こんなに晴天が続いたのは、西に高気圧、スコットランド東方に発達した低気圧という気圧配置に変化がなかったからである。ウォーキングを楽しめたのはよかったが、この気圧配置のせい火山灰の影響を受けたともいえる。

2週間も滞在すると、季節がどんどん進んでいくのが分かる。平年より低めの気温が続いていたが、それでも日増しに気温も上がり、日差しが強まっていく。旅の2日目にブロードウェイで見たマドニエは、ようやく展葉が始まったところだった。それが、1週間後のロンドンではしっかり展葉しており、さらにその4日後にはほぼ満開になった。

ちなみに向こうではもっぱらBBCで天気予報を見ていた。あちらでも日本と同じで、お天気専門の女性キャスターがいて、数人が代わる代わる登場する。毎日見ているうちに顔見知りができた。

エピソード—買い物

ロンドンで万引き犯に疑われた。いよいよ旅も終わりに近づき、スーパーでお土産になりそうなものを買出しした。帰り道、飲み水を買ったことに気づき、小さな商店に入った。ミネラルウォーターのボトルをレジに持っていくと、アルバイト風の店員が「そっちの袋はなんだ？」と問い詰めてきた。片言でさっき立ち寄ったスーパーの名前を言ったが、全然納得してもらえず、別の店員もやってきてレシートを見せると

言う。財布を捜したが、レシートは発券してもらっていないかった。面倒なことになったと思ったが、清算待ちの客が後につかえていたこともあり、もう行けと言われた。日本では問題にならなさそうだが、NGだったのかもしれない。開放されてほっとしたが、侮辱されたようで腹立たしく、会話力不足の自分が惨めでもあった。

旅の参考資料

- ・ 紺野康夫 訳「農村に命の脈わいを」。Defraの環境スチュワードシップの日本語訳を読むことができる。http://tech.obihiro.ac.jp/nazomura/konno_proplant.html (2010/12 現在)。
- ・ 小関由美 (2008) 『英国コッツウォルズをぶらりと歩く』小学館
- ・ 鷲谷いづみ (2004) 『自然再生—持続可能な生態系のために—』中公新書。イギリスの環境事情についての記述も多い。
- ・ “National trails” <http://www.nationaltrail.co.uk/> イギリスのフットパス事情 (現地の公式サイト、2010/12 現在)
- ・ モーリー7号「特集 歩く道の文化 英国生まれのフットパスを北海道にも」北海道野生生物基金
- ・ 平松紘著 (2002) 『ウォーキング大国イギリス—フットパスを歩きながら自然を楽しむ—』明石書店